

北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集

史跡
伊勢堂岱遺跡

発掘調査報告書

2011・3

北秋田市教育委員会

序

北秋田市には旧石器時代から近世まで約260ヶ所の遺跡があり、学術的にも貴重な資料を保存しております。その中でも伊勢堂岱遺跡は地域の宝として調査と活用を進めてまいりました。

国指定史跡伊勢堂岱遺跡は平成8年に道路計画を中止し、現地保存した遺跡であります。平成9年から学術調査を開始し、並行して史跡整備にも取り組んでおり、平成21年1月にはユネスコ世界文化遺産の国内暫定一覧表に登録され、さらなる保存・活用が期待されています。

本報告書は平成9年度から継続した発掘調査をまとめたものです。調査から史跡の全体像が明らかになりました。今後は多くの方が史跡に訪れていただくために見学環境を整える予定です。

最後に、発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、ご指導、ご協力をくださいました関係各位・関係機関に対しまして、深く感謝を申し上げますとともに、今後も史跡の整備事業につきまして、一層のご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成23年3月

北秋田市教育委員会
教育長 三澤 仁

例 言

1. 本報告書は平成7年から22年度まで実施した史跡伊勢堂岱遺跡の発掘調査報告書である。これまでの調査のうち、縄文時代のものを中心に編集した。
2. 発掘調査及び報告書作成は、国庫・県補助金の交付を受けて、北秋田市教育委員会が平成22年度に実施したものである。
3. 本遺跡の発掘調査の報告や概報は過去にも公表してきたが、本書の記載内容が優先する。
4. 本報告書の執筆・編集は榎本剛治が行った。但し、第5章第1節は(株)加速器分析研究所の委託成果報告書を使用している。また、同第2節は藤本幸雄氏(調査検討委員)に玉稿を賜った。
5. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行1:25000地形図「鷹巣」、「大館」、「米内沢」、「大葛」を合成し、使用した。
6. 本報告書の土層註記、土器観察表は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀男1993)に準拠している。
7. 調査に関する遺物、記録類は北秋田市教育委員会において保管している。
8. 発掘調査から報告書に至るまで、多くの方にご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

(敬称略、五十音順)

秋元信夫、阿部昭典、五十嵐一治、石井 寛、磯村 亨、宇田川浩一、遠藤正夫、近江俊秀、大野憲司、岡田康博、小笠原雅行、葛西 勵、加藤里美、加藤元康、桐生正一、児玉大成、小林青樹、小林 克、佐々木藤雄、佐藤三七、佐藤智雄、島田祐悦、新海和広、信太正樹、菅原広樹、梶山林繼、大工原豊、高橋 毅、高橋忠彦、高橋 学、滝本 学、谷口康浩、土肥 孝、長沼 孝、中村 大、中村耕作、成田滋彦、禰宜田佳男、原田昌幸、藤井安正、藤沼邦彦、松田孫明、三浦貴子、水ノ江和同、宮尾 亨、安田忠明、谷地 薫、渡辺丈彦、Simon Kaner

凡 例

1. 遺構図における北の矢印は、国家座標X系による座標北を指す。なお、座標北と磁北との偏角は、磁北から東に7°50′00″の方向である。
2. グリッドは4m×4mを1単位とし、東西方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を付して呼称している。
3. 本稿での遺構番号は、北秋田市教委が調査を行ったものは、調査次+遺構分類+遺構番号と表記した。(例：4次調査で発見された土坑で1番の場合→4SK01)
4. 遺構の高度は標高点から測定したもので、単位はメートルである。
5. 遺構及び遺物実測図の縮尺については、各挿図にスケールを記しているので参照されたい。
6. 遺構図中のアルファベットのうち、大文字は土層セクションポイント、小文字はエレベーションポイントを表す。
7. 土層断面図中の破線は、推定線を表す。
8. 遺構平面図中の上場破線はプラン及び推定線、下場破線はオーバーハング部分を表す。
9. 遺構実測図、遺物実測図で使用したスクリーンパターンは、下図に示す通りである。
10. 土器断面の表現、石器の表現は、下図に示す通りである。
11. 遺構及び遺物観察表中の△は確認値及び現存値、()内は推定値を表し、●はアスファルト付着を表す。長さ・幅・厚さの単位はセンチメートル、重さの単位はグラムである。
12. 写真図版中の遺物番号は、挿図のそれと一致する。

(遺構用トーン)



柱痕



焼土



地山



攪乱

(遺物用トーン)



ツブレ

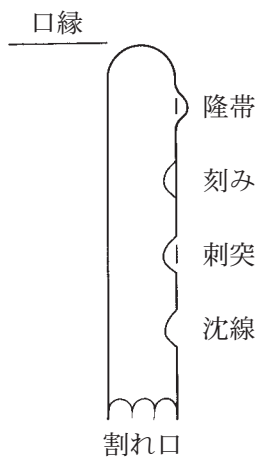


割れ口



赤彩

(土器断面模式図)



(石器模式図)



目 次

序

例 言

凡 例

第 1 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯	7
第 2 節 これまでの調査	7
第 3 節 調査要綱	14
第 4 節 遺構の分類	15
第 5 節 遺物の分類	16

第 2 章 遺跡の概要

第 1 節 自然的環境	18
第 2 節 歴史的環境	20

第 3 章 これまでの調査

第 1 節 地区区分	23
第 2 節 基本層序	25
第 3 節 エリア①- 1	26
1. 環状列石 A	
2. 環状列石 B	
3. 環状列石 C	
4. 環状列石 D	
5. 土 坑	
第 4 節 エリア①- 2	105
1. 配石遺構 (第17次調査)	

2. 集石遺構	
3. 第9列トレンチ	
第5節 エリア①-3	111
1. 第17次調査検出遺構	
2. 土坑	
3. 集積遺構	
4. 溝状遺構	
第6節 エリア②	129
1. 溝状遺構	
2. 埋設土器	
第7節 エリア③	131
第4章 出土遺物	
第1節 土器	132
第2節 土製品	135
第3節 石器	152
第4節 石製品	170
第5章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代(AMS)および炭素窒素安定同位体分析	181
第2節 環状列石構成礫について	190
第6章 総括	
第1節 土地利用の変遷	203
1. 出土土器の検討	
2. 遺構の変遷	
第2節 環状列石の造営	217
1. 礫の獲得と運搬	
2. 造営地の選択・環状列石造営	
第3節 出土遺構について	218
1. 掘立柱建物跡の構造について	
2. 溝状遺構	

第4節 出土遺物について	220
第5節 伊勢堂岱遺跡の位置づけ	223
1. 伊勢堂岱遺跡の性格	
2. 北海道・北東北における環状列石	
写真図版	227

報告書抄録

付図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

大館能代空港(通称あきた北空港 平成10年7月開港)建設に係わる整備事業として、県道木戸石鷹巣線が空港と国道を結ぶアクセス道路として改良整備されることになった。これに伴い、秋田県教育委員会および鷹巣町教育委員会(当時)が平成4年度に路線内の遺跡分布調査を行い、伊勢堂岱遺跡が存在することを新たに確認し、平成6年度に秋田県埋蔵文化財センターが路線部分で範囲確認調査(第1次調査)を、引き続き平成7・8年度に発掘調査(第2・3次調査)を実施した(調査面積7,047㎡)。

第2次調査では、西側調査区とした区域において長径約32mの環状列石Aと、確認長15mの弧状をなす環状列石Bを確認した。

第3次調査では、環状列石Aの南側の精査を行った結果、前年度に検出されていた柱穴群が環状列石Aとは逆方向に展開する掘立柱建物跡であることが判明し、調査区南側にもう一つの環状列石が存在する可能性が強まった。このことから、ハンドボーリング探査を実施し、長径約45mの環状列石Cの存在を確認した。

当初は記録保存を目的とした発掘調査のため、調査終了後に環状列石Aを空港に隣接するポケットパークへ移築することが計画されたが、3つの環状列石の発見から、遺跡の重要性を地域住民や県民が理解し、遺跡保存の声が高まり、秋田県は平成8年11月18日に道路建設ルートの変更と遺跡の現地保存を決定したのである。

平成9年度からは鷹巣町教育委員会(当時)が、国庫補助、県補助金交付を受け学術調査を継続して実施した。遺跡範囲確認調査および内容確認調査を平成12年度まで行い、遺跡が約20万㎡に広がることを確認した。また、ハンドボーリング探査によって、環状列石Cの南側に新たに長径約36mの環状列石Dを検出し、遺跡が縄文時代後期前葉に属する4つの環状列石を中心とした、配石遺構、掘立柱建物跡、土坑群、捨て場などで構成される大規模な祭祀の場であることが判明した。

このような遺跡の重要性が評価され、平成13年1月に遺跡範囲約20万㎡のうち、約16万㎡が国の史跡に指定された。

平成13年度からは史跡の内容解明のための基礎データ収集を目的とした内容確認調査を実施しており、環状列石が集中する台地北西部を中心に調査を進めている。そして、平成20年度から台地東部も対象とし、調査範囲を拡大した。

なお、鷹巣町は平成17年3月に隣接する合川町、森吉町、阿仁町と合併し、北秋田市となった。発掘調査・整備事業は北秋田市教育委員会に引き継がれたのである。

第2節 これまでの調査

第4次調査(平成9年度)

調査期間：平成9年9月2日～12月2日

調査面積：1,527㎡

調査区：環状列石C・詳細分布調査トレンチ

調査成果：トレンチ調査による範囲確認調査を実施し、遺跡範囲の南限を確認するとともに、遺構・遺物分布に偏りがあることを確認した。また、内容確認調査は、前年度にハンドボーリング探査で確認された環状列石Cの北東部分でトレンチ調査を実施し、列石の構成礫を検出した。

第5次調査(平成10年度)

調査期間：平成10年5月6日～12月1日

調査面積：2,336㎡

調査区：環状列石C・詳細分布調査トレンチ

調査成果：範囲確認調査は遺跡全体の空間利用の様相を明らかにすることを目的に、トレンチ調査を実施し、遺構・遺物の分布状況から、暫定的に4つのエリアに区分した。内容確認調査は、環状列石Cの北東部分(全体の1/4)を面的に調査し、環状列石Cは長径45m、短径42mの規模で、3重の円環であることを確認した。

第6次調査(平成11年度)

調査期間：平成11年5月6日～12月2日

調査面積：3,007㎡

調査区：環状列石C・詳細分布調査トレンチ

調査成果：範囲確認調査は前年度調査に推定した各エリアの性格を解明することを目的に、面的な調査を実施した。遺跡内における遺構の分布状況から、大きく①～③の3つのエリアを設定し、エリア①についてはさらに3つに細別した。内容確認調査では、環状列石Cの北西部分の面的調査を行い、列石内部を掘削し、その排土を周囲に盛土した後に礫を配置する地形改変の痕跡を明らかにした。

第7次調査(平成12年度)

調査期間：平成12年5月8日～11月14日

調査面積：727.8㎡

調査区：詳細分布調査トレンチ

調査成果：環状列石Aより北側部分でハンドボーリング探査と地形測量を行い、最古段階と考えられる土坑墓を検出した。また、ハンドボーリング探査で環状列石Cの南側において、新たに環状列石Dを確認した。

第8次調査(平成13年度)

調査期間：平成13年4月23日～11月28日

調査面積：223㎡

調査区：調査区①(環状列石D)・調査区②(環状列石Cより東側)・調査区③(列石Dより西側)

調査成果：環状列石Cより東側、環状列石Dの本体、環状列石Dより西側緩斜面の3地点で、内容確認調査を実施した。環状列石Cより東側の調査で掘立柱建物跡が分布することを確認した。また、環状列石Dの調査では、他の環状列石と同様に列石内部を削平し、列石を構築していることを確認した。

第9次調査(平成14年度)

調査期間：平成14年5月1日～11月22日

調査面積：410㎡

調査区：調査区①(環状列石D)・調査区②(環状列石Cより東側)

調査成果：環状列石Cより東側地区と環状列石Dの北西部分で内容確認調査を実施した。環状列石Cの調査では、列石、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑が三重に巡る構造を確認した。また、環状列石Dは面的に調査を行い、列石が内帯と外帯、およびそれらの間に配置される配石遺構で構成されることを確認した。

第10次調査(平成15年度)

調査期間：平成15年5月1日～12月5日

調査面積：291㎡

調査区：調査区①(環状列石Dより東側)

調査成果：環状列石Dの外周で掘立柱建物跡を確認することを目的に、環状列石Dの北東部分を調査した。調査では多数の柱穴を検出し、柱穴配置の検討から、少なくとも5棟の掘立柱建物跡が存在したことを想定した。また、環状列石Cから環状列石Dの周辺を中心に地形測量を実施し、地形図を作成した。

第11次調査(平成16年度)

調査期間：平成16年5月6日～11月29日

調査面積：214㎡

調査区：調査区②(環状列石Cより東側)

調査成果：前年度調査の地形測量で確認した人工的な地形の性格を明らかにすることを目的に、調査を行った。その結果、人工的地形は古代以降の所産と判明した。さらに下層から同時期の列状の配石遺構や大型不整形土坑墓を検出した。

第12次調査(平成17年度)

調査期間：平成17年4月25日～11月29日

調査面積：122㎡

調査区：調査区④(環状列石B南部分)

調査成果：環状列石Cから台地斜面に向かって、ハンドボーリング探査を実施し、小形配石遺構と

考えられる反応を数ヶ所検出した。また、環状列石B南部分で礫の分布を確認するため、トレンチ調査を実施し、礫の分布を記録した。

第13次調査(平成18年度)

調査期間：平成18年4月25日～11月29日

調査面積：326㎡

調査区：調査区④(環状列石Cより西側)

調査成果：前年度得たハンドボーリング探査の成果から、環状列石Cより西側で調査を行い、列石に伴う掘立柱建物跡、配石遺構、竪穴遺構などを検出した。

第14次調査(平成19年度)

調査期間：平成19年4月23日～11月30日

調査面積：477㎡

調査区：調査区①(環状列石D本体西部分)

調査成果：環状列石Dの北西部分を調査し、列石の構築単位・石質などを解明した。また、列石外周には掘立柱建物跡を構成する柱穴を確認した。

第15次調査(平成20年度)

調査期間：平成20年6月1日～11月30日

調査面積：288㎡

調査区：調査区④(列石Cより北西側)・調査区⑤(環状列石Aより北側)・調査区⑥(SD05)

調査成果：環状列石Aの全体像を確認するために、構成礫の北端部分を調査し、道路状遺構を検出した。また、遺跡東部の溝状遺構SD05の広がりを確認した。

第16次調査(平成21年度)

調査期間：平成21年6月1日～11月30日

調査面積：144㎡

調査区：調査区⑤(環状列石Aより北側)・調査区⑥(SD05)

調査成果：前年度検出した道路状遺構の広がりを確認した。また、引き続きSD05を調査し、南端部分を把握した。

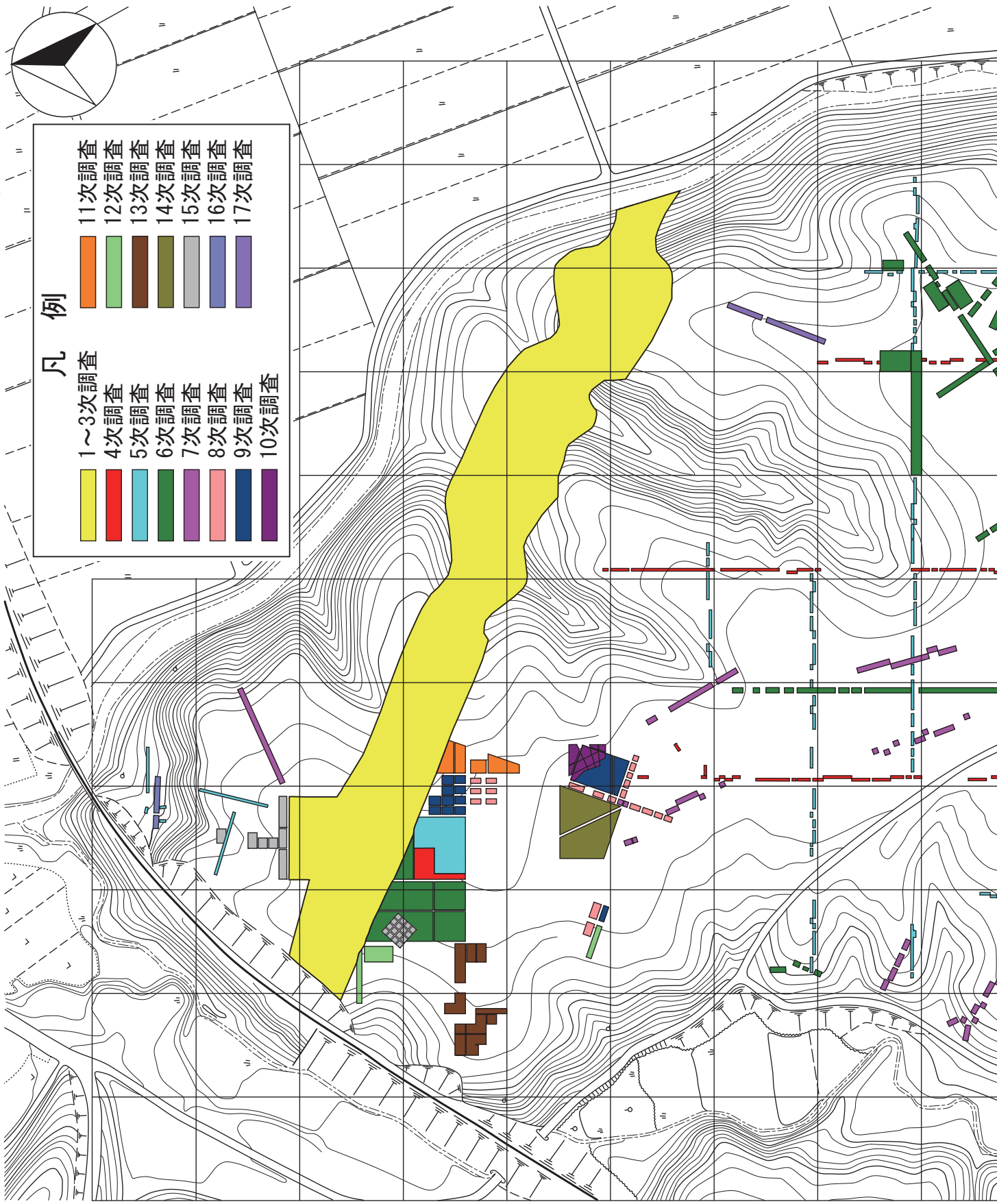
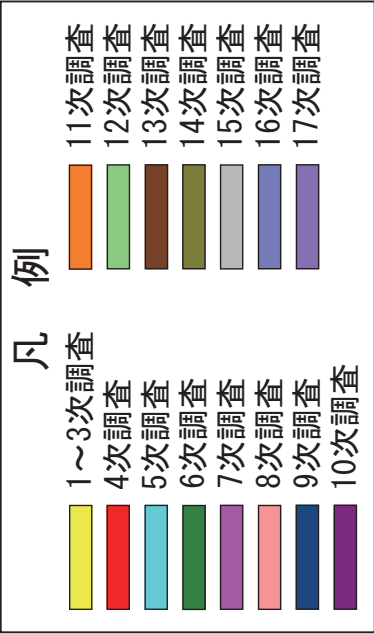
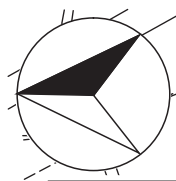
第17次調査(平成22年度)

調査期間：平成22年6月1日～11月15日

調査面積：76㎡

調査区：調査区⑥

調査成果：環壕の年代を確定するために、トレンチ調査を実施した。また、台地中央部に位置する配石遺構の広がりをハンドボーリング探査で確認した。



90 80 70 60 50 40 30 20

图1 発

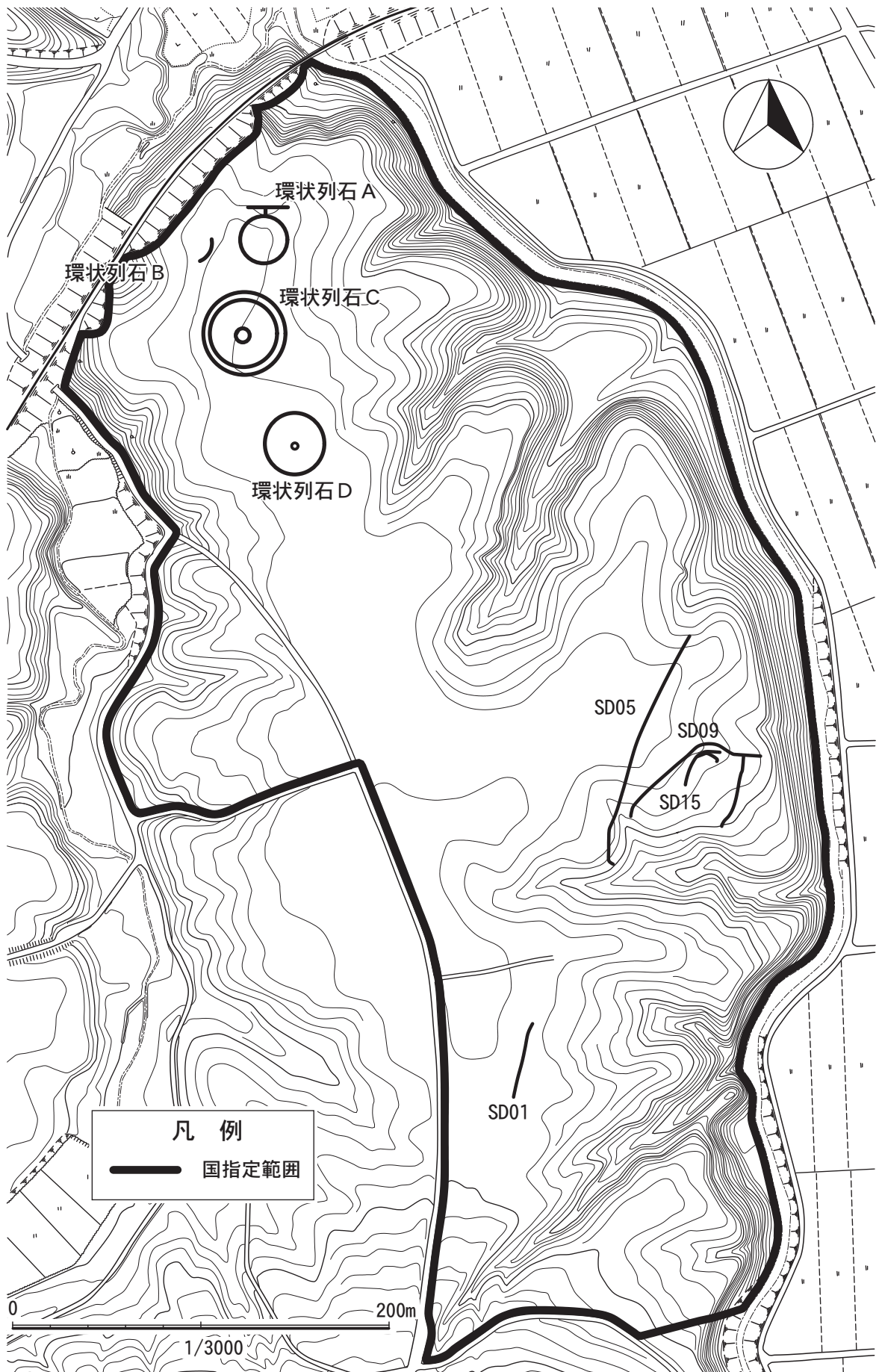


圖 2 遺跡全体圖